

しても、これが考古學・東洋史學に對する寄與は吝なく認められるべきであると想ふ。(四六倍版、東亞考古學會發行定價十圓)(小野)

○近畿地方古墳墓の調査 一

日本古文化研究所報告 第一

日本古文化研究所の考古學的方面に於ける昨昭和九年度の活躍は梅原京大助教授の手によつて、日本に於ける古墳墓の中、近畿地方のものに對してなされたのである。即ち本書がその報告として提出せられたものである。

本書に於いてなされた古墳墓の調査は大和にあつては奈良市鶯塚古墳、越岩屋山古墳、櫻井町艸墓古墳、平群村西宮古墳の四基、山城にては乙訓郡雁子岳の一古墳、攝津にては耳原古墳、鉢塚古墳、火打村勝福寺古墳の三基、河内にては寛弘寺の一古墳、飛鳥の石室古墳二基、一條の方形墳の四基、通計十二基の古墳と附録として備後御年代古墳の調査をのせられてゐる。これらの十數基の古墳は、その中二三の封土の調査されなかつたものを含

むが他はすべて封土の實測と石室の實測をあはせ行ひ、從來この二者が一般に切りはなされて考へられ特に封土の如きはその實測に多人數の協力を要するものなる點より行はれたること極めてまれであつたものであるが、本書に於てはじめて古墳外形の實測と古墳主體の實測とを共に行ひその間に於ける二者のより高次な連繫を考へんとした。從來行はれきたつた封土、石室、及び遺物の三者の各々個別的なる研究に對して、この三者の綜合的同時的研究よりする全的古墳の有機的存在形態を見極めんとの意圖によつてなされたもの、先づ最初に世にあらはれた成書である。従つて同一の意圖によつて以後本研究所に於てなされると豫定せられる古墳調査の繼續の結果はこゝに我國古墳の鬱然たる書籍化が完成せられるであらう。

此如き研究態度をもつてする時は、本報告書の如き僅々十數基の古墳の調査の結果に於ても左記の如き新事實を知る事ができたのである。即ちその重なるものを擧ぐるならば、遺骸の埋葬後に戸口の構造部分が封土の外に

現はれてゐたものゝある事を推知し得られた事、家族墓と一般に考へられてゐる横穴式石室墳の中に單墓なる明證のあるものある事、又石棺と羨道の幅員及び石棺の高さと玄室の高さとの差より古墳の築成時の被葬者死後にある事を知るを得るものゝ存する事や、埴輪圖筒配列の形式を明らかにし得たもの及びそれより古墳外形の遇然的な推知をなし得たごときは即ちこれである。

我々はなほより以上の多くの新事實を報ぜられそれよりして我原史時代の研究に資せんが爲に以後續々と古墳墓調査の行はれん事及び調査當事者とのに協力すべき人々の渝らざる努力を望まねばならない。(四六倍判、本文七十四頁、圖版四七、百部限定三圓五十錢)

○ Nils Palmgren ; Kansu Mortuary

Urns of the Pan Shan and Ma Chang

Groups, (Paleontologia Sinica, Series D.

Vol. III. Fasc. I) Peiping 1934

支那甘肅地方に於ける彩色土器文化期遺物は、それが

遠く西方との文化的關係を示すものとして學界に興味をなけたものであつた。併し我々は長い間アンダーソン博士の略報以外詳しい記述を持たなかつた。それが昨年に至り一つは同博士の "Children of the Yellow Earth" として、一つはこゝにのべんとする Palmgren 博士の本書に依つて支那彩色土器の本質を知る事になつたのはよろこばしい事である。

ハルムグレン氏は本書に於て、半山期(所謂仰韶期)、及び馬廠期の彩色土器を同一の表題下に、器の製作方法より、器形文様を記述してゐる。今ま讀過の際の二三の感想を擧ぐるならば、氏がこの兩期の彩色土器の製作を詳細なる觀察上よりして、從來の見方に反して輪積み即ち氏の所謂 ring method によるものとした事は、先づ注意すべき新事實といはねばならぬ。又この兩期に存在する人身文様を渦文より發展して來た自然的な經過の上に觀取した事は、豊かな資料を取りあつかつて、その文様分類と發展を觀察した事とともに、本書の出現以前には知るよしのなかつたものである。尤も器形の方面に於

ける變遷、即ち、鉢形土器より有頸無花果形壺にいたるそれは自然的發展の上に考へ得べきものありと思ふ點や、又氏の所謂「マーク」を以て製作者の記號とする點などは充分の研討の結果我々は當否を論ぜねばならぬ。然し從來公開せられなかつた *Platté* 文様を有した一群の彩色せられない土器を紹介しこれが彩色土器の發展の他の方向を歩めるものとして、その文様付致の様子を彩色土器と比して記されたるは又我々に一つの新事實（勿論この類に屬すべき鬲形土器は唯一つすでにアンダーソン博士によつて甘肅考古記に圖示されてはゐるが）を教へてゐる。

氏は文様の考察の上に上記二期の聯絡とその前後、ひいては所謂齊家期或は辛店、寺窪期の土器との前後を述べてアンダーソン氏のなした六期を或程度認めてはゐるが、氏自身としての年代考察や遺物の文化的位置關係を論考する事なく全篇たゞ二期の彩色土器及同系統の土器類の忠實なる記録に終始するにすぎぬ。それは吾々によつてものたらぬとされる點ではあるけれど、一面からす

れば遺物の精細なる圖版とその一々についての克明な解説、及びその分類上の位置を記し、またストックホルム極東博物館所藏以外のこの二期の彩色土器の所藏者、及びその土器の形態文様をのせてゐる故に、吾々が本書一冊を所有する事は、この上記二期に於ける彩色土器の全部を把握する事となつて此の點學說の餘りに多く盛られた書籍の多きに過ぎる現在、寧ろ推重すべき作品と言ひ得る。本書は遺物の書籍化といふ地味な努力的な作品である。本書はいはば考古學の一つの素材である。吾々に遺物自身のありかたをつけてゐる。吾々はやがてこの上にこの材料の取扱ひよろしきを得る時、そこに偉大なる建造物をなす事を得やう。しかしそこにはこの素材をあたへられたバルムグレン氏の偉大なる努力がひそんでゐる事をわすれてはならない。（菊俣版、本文一九七頁、圖版四十一）（以上中村）

○ Hubert Schmidt; Cucuteni in der

Moldau, Rumänien. (Berlin u. Leipzig 1932)